



特選 えっそれもこれも捨てるの子らが来て

地蔵町 佐古徳子

(評) 話し言葉が自然体で生き生きとしている。親の世代と子の世代のギャップに笑いを誘われるが、母あるいは父の「納得できない」という思いには切実感もある。体裁よくまとめた句ではないところに新しさを感じる。(裕見子)

入選 ことごとと話したいことお豆さん

地蔵町 大谷のり子

(評) 豆を煮ることごとという音が聞こえてくる。ことごとと豆を煮ながら、ことごとつぶやき話しかけている。いや、話しかけたいことを胸に抱きながら煮ているのか。あまり、美味しくない豆が煮詰まる。(恒雄)

入選 あの席で遠くばかりをみていたね

松原町 川村美栄子

(評) 「あの席」をさまざまに想像させる余地のようなものを持つている。また、「見ていた人」はもうこの世にはいないのだろうと思わせる淋しさが漂っていて、ほろにがい甘さも立ちのぼってくる。(裕見子)

特選 日が昇る面白かったと日が沈む

須越町 島田洋子

(評) 朝が来て楽しい一日が始まり、面白かったと夕暮れる。何があったのかは分からないけれど、充実した半日だったのは分かる。そして、日が沈んでからの半日はどのように経過するのだろうか。哀しいだけの月が出るのか。(恒雄)

入選 土の香が迎えてくれる精が出る

宇尾町 門野操

(評) 実感句。作付け計画を練る、堆肥を撒く、施肥、掘る、種を蒔く、苗を植える、間引き、虫取り、水やり、追肥、草刈り、収穫…と、順番は様々で仕事は多い。小さい畑でも大変だが、汗に対する手応えはある。(十九郎)

特選 ものさしは違いますけど影二つ

大藪町 大塚しのぶ

(評) 価値観―社会生活の上で、どうすることに価値があるか、ということに関する考え方―には、物差し―物の価値判断の基準―が必要である。物差しの違う二人が、互いに寄り添い、補い合い、協力しながら、共通の目的を遂げようとしている。(十九郎)

入選 いろいろの花に交じって咲いている

甘呂町 辻静枝

(評) 単にお花畑の様子を描写したと見る人もあるだろう。その解釈もまちがってはいないと思うが、作者自身がこの世に生きて存在するさまを表現しているようにも感じるのである。「いろいろんな人に交じって笑ったり泣いたり私」かもしれないと思うのだ。(裕見子)

入選 リハビリの妻にやさしき糸柳

稲里町 勝見政恵

(評) 脑梗塞か骨折か。大病をされて、それでも気丈にリハビリに取り組んでおられる奥様の励みになるのは、風にそよぐ柳の細い葉。そのたおやかさのように頑張れと見守る作者。柳の緑に慰められている。
(恒雄)

佳作 山になると信じて石を積んでいる

堀町 河分武士

佳作 春の雨ザリガニ二匹こんなところ

長浜市 宇野文代

入選 孫が来てばあちゃんちよっと縮んだね

東沼波町 野口博子

(評) 孫の祖母への愛情たつぷりの気持ちがよく表れている。中七、下五に会話そのままを持ってきて臨場感のある川柳に仕上がった。ちよっと縮んだね、に祖母を温かく気遣う孫の心情が濃縮されている。
(十九郎)

佳作 てのひらの種がうごめく春の風

東沼波町 沼波ひろ子

佳作 臥せて知る秘めた夫のホットな手

京町二丁目 川辺由子

佳作 ひたすらに続けていたら咲いていた

鳥居本町 谷口繁子

佳作 ひなあられポッケを走る笑い声

稲里町 覇流 不良者

佳作 ストロウの穴から牛乳こぼしけり

極楽寺町 古川寛二

佳作 がまんだよそのうち風がふきますよ

近江八幡市 浅野 忍



佳作 安穩の春の歡び寄り添えて

正法寺町 金子君子

佳作 八十翁スマホチエックに明け暮れぬ

犬上郡多賀町 東岸 隆

佳作 健やかに生きて嫌われ草虱

甲田町 平田政江

佳作 少しだけ揺れてみたいな春うらら

八坂町 森 孝子

佳作 甘えなさいお隣さんから声かかる

大藪町 加藤佑子

佳作 古時計夢の欠けらをそっと抱き

清崎町 柳本和子

佳作 一つ鍋声もぐつぐつ煮えている

東近江市 河崎 章

佳作 残り火をそっと大事にして生きる

西沼波町 外海芳子

佳作 一人来てせつない思い出のベンチ

鳥居本町 寺村美恵

佳作 孫の夢わが青春と重ね合い

宇尾町 金森光男

佳作 褒め上手聞くことうまくなりました

犬上郡甲良町 松宮 清

佳作 老いてなを夢持ち生きる日々樂し

愛知郡愛荘町 吉岡静子

佳作 またひとつ秘密つくって猫もどる

開出今町 掛田洋子

佳作 空腹を知らない子らの手にスマホ

正法寺町 高井 豊

佳作 出直しを誓う親子に陽は燦と

東近江市 小林清次郎

佳作 地の底に落ちたら底を掘ってゆく

犬上郡豊郷町 須田 さゆり

《総評》

川柳は、原則として、五音、七音の組み合わせで、合計十七音の定形を守りながら、できるだけ口語で創る。事物の説明だけでは駄目で、作者の思いを読者に届ける工夫が要る。そして、言葉を選び、安易に破調―定形の音数を崩すこと―としないように心掛ける。

川柳の作風も様々であるから、種々の川柳作品を読んで、自分に合う作風を見つけ、それを手本として創り進めればよい。作風が合わなくなれば、また、合うものを探るか、自分で創り出せばよい。

創り出した川柳作品が、作者の思いを読者の心に響かせる表現になっているかを、言葉や漢字の使い分け、送り仮名などを国語辞典、その他で調べ、何度も練り直して確かめてから投句してほしい。

来年度も佳吟に出会えることを大いに期待しています。

青木 十九郎

今年も多くの方からの投句が寄せられ、嬉しく思っております。六二名の投句一八五句。しっかりと読ませていただきました。

十七音で感じたことを表現するのは、おそらく日本人ならたいたいの人にとってそれほど難しいことではないと思います。話しよく、聞きよい文言は五七調ですので、万葉集以来どうも私たちはそういうリズムで詩を書く遣伝子を持っているようです。

ということで、川柳の歴史が始まって以来どれほどの句が詠まれたのでしょうか。誰にでも作れる五七五ですので、同じ句中にはあったでしょうし、同じような句はもつとあったに違いありません。頑張った作った句であっても同類の句が既にあれば没になってしまいます。出句するとき確かに「私」の句になっているかどうかの吟味は必要です。機知やしゃれっ気というものも必要です。自戒も込めてそんなことを思いながらの選でした。

重森 恒雄

今年度の川柳部門への応募は、昨年より六人増えて、六十二人の方が作品を寄せてくださいました。ありがとうございました。

文芸は総じて「創作」であり、フィクションによって真実を追求する世界でもあります。しかしそれは、立派なことや前向きなことを書くということではありません。また、事実の報告や一般論を述べることから、一步踏み込んでほしいのです。

当然ながら、作品の核になるのは自分自身の考え方や心の動きであり、自分の目を通したことが詠つてあるかどうかが大切です。

投句は三句出せますから、そのうちの一句くらいは「こんなのが川柳と言えるかな？」と、少し冒険をした句を書いてみるのも入選のポイントとなるかもしれません。意外に、美しく整った句は選者の目に留まりにくいものです。

川柳は時代と共にあり、「今」という時代の中にあります。

「今日の私」にしか書けない一句によって、読んだ人の心が潤ったり、深い共感に力づけられたりもします。

来年も、あなたの作品を待っています。

峯 裕見子

選者吟

新しい革袋持て春の道

青木十九郎

背信のむらさき色がぶら下がる

重森恒雄

見ていてね翼になってゆく腕を

峯 裕見子